

後鼻漏に対する鍼・温灸治療

たなか まさる
田中 勝

田中鍼灸指圧治療院
鍼・温灸&経絡按摩・関節運動法講習会主宰

はじめに

本誌2018年1月号の特集「音楽家への鍼灸マッサージ」から3カ月にわたって症例を報告してきたが、今回は後鼻漏への治療を報告する。後鼻漏とは、過多になった鼻汁が鼻咽腔に流れ出ていき、喉に詰まったり絡んだりするものである。

【患者情報】

女性、71歳

【主訴】

夜、寝ていて鼻汁が喉に落ちて、咳が出て眠れない。昼間は寒い屋外から温かい部屋に入ると鼻水が出る。

東洋医学的診断

筆者の経験上、鼻汁が出る症状の治療穴は、主に「外風府」(私方穴)を用いている(図1)。しかし、本症例は単に鼻汁が出るだけでなく、それが喉に落ちるといふ症状が主訴である。そのため鼻咽腔、つまり鼻のやや奥に作用させなくてはならない。そこで、後頸部、督脈の風府外側の外風府に対して、そのわずか下方にある「内天柱」(私方穴。僧帽筋内側部の硬結・圧痛部位で、外風府の約1.3cm下方、瘻門の外側5分)を治療穴として選んだ(図1)。

患者は、「普段、左側のほうから鼻水が喉に落ちている気がします」といふ。そこで、腹臥位で、まず左外風府に対して母指の指先を立てて持続圧すると、鼻の奥にひびいた。30秒く

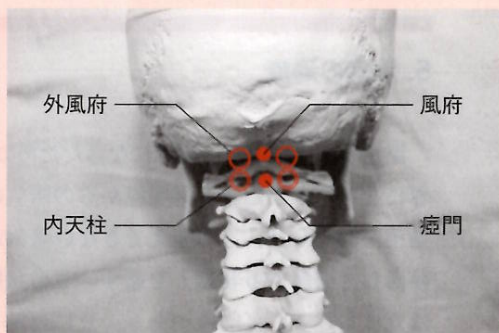


図1 外風府と内天柱の部位

らい経つと、鼻が通った感じになったという。

次に内天柱を指圧すると、先ほどひびいた鼻の部位よりもさらに鼻の奥、喉に近い部位にひびいた。

また、鼻の症状は肺の弱りに起因し、風門や肺俞に硬結・圧痛が現れることが多い。これらのツボに診断按摩をして調べると、左風門に硬結が診られた。

施術

【腹臥位】

左風門に1寸3分-00番鍼を刺鍼して回旋・雀啄し、ひびきを得る。左内天柱に1寸3分-00番鍼で約3cm刺鍼して回旋・雀啄すると、指圧したときよりも強く鼻の奥にひびいた。右側の内天柱にも同様に刺鍼してひびきを得る。それぞれひびきを得たら、置鍼しておく。

上記の3穴に置鍼をしたまま、手拭いをかけて、温灸を2つ持って温める。温めて5~6分経ち、皮膚が発赤して鼻の奥に温かさを感じたら、

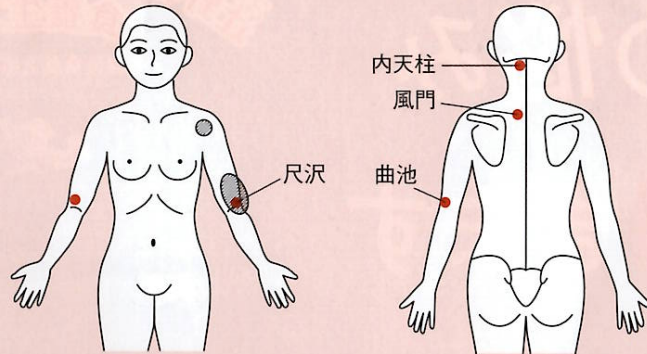


図2 治療穴と冷え（斜線部）の診られた部位

一旦、温灸を置いて、置鍼の鍼を回旋・雀啄してひびかせ、もう一度、温灸で温める。置鍼時間は約20分で、そのうち温灸は約15分行った。

【背臥位】

背臥位になってもらい肺経の募穴である中府を左右、触診すると左側がやや冷えていて、上肢の冷えを調べると肘の内側部から外側部にかけて冷えていた。

左右の尺沢と曲池の4点を同時に指圧しながら鼻を意識して呼吸を深くしてもらおうと、鼻の空気の通りがよくなった。左右の尺沢と左の曲池の3点到10分間、置鍼、温灸をした（図2）。

施術終了から経過

施術を終えて患者に起きてもらおうと、鼻がスースーと通り、喉がスッキリした感じで気持ちよいという。「鼻水が詰まっていたと思うのですが、どこに行ったのかしら？」と不思議がっていた。

患者はビールが好きとのことだが、これは喉や胃を冷やして鼻汁が出ることにつながる。生活指導として、ビールを極力控えること、肘を冷やさないようにすることをアドバイスした。

【経過】

初診から5日後、第2診の治療にかかった。

前回の治療後、就寝時、鼻汁が喉に落ちる量が半分くらいになった感じがするが、やはり咳が出て目が覚めたというので、初診と同様に施術した。

さらに5日おいて第3診を行った。第2診後、鼻汁はかなり少なくなり、咳は出たもののすぐに眠ることができたという。中府と肘の冷えがなくなって、内天柱と左風門の圧痛は初診時ほど感じなくなっていた。また、刺鍼時のひびきも初診時ほど起こらなくなった。

さらに5日後に第4診を行った。第3診後からも鼻汁が喉に落ちることもなくなり、咳も出なくなって久しぶりに朝まで熟睡して目覚めがよかったという。さらに、寒い所から温かい部屋に入っても鼻汁が出なくなった。

考察

症状に合わせて発症部位を狙った細かな選穴が、期待通りの治療効果をもたらしてくれた。それだけでなく、集中・継続して施術にかかったことと、好きなビールをほとんど飲まなかったこと、5月であったが寝るときに長袖のジャマを着て、肘を冷やさないようにしたことなど、患者自身の取り組みが症状の改善につながったと思われる。